

三河 アララギ

平成二十二年

八月号

第五十七巻 第八号



ニューヨーク日記(46)

<http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

May 18, 2010 : Monte Carlo

Blue Shoe Diaries



モンテカルロ、モナコに来てみました。丁度一昨日あのF1グランプリがあったばかりで町中の道はまだレーストラックのよう。その道を普通の車で通りながらホテルに行ったのも面白かった。この景色はお城からなんだけどレースを見る観客用の席がまだ残っているのが見えるでしょ

This is Monte Carlo, Monaco. A little country of its own. It was the F1 Grand Prix race 2 days ago so the streets in the city still look like the race track. Quite an experience to go thru the actual track in a normal car to get to the hotel! Here, I'm at the castle getting a nice view of the track and bleachers for the race. Maybe some day I'll get to come see the race. It's a tiny and super polished place that feels almost unreal.

目次

第五十七卷第八号(通卷六八〇号)

表紙カッ卜(夏休み) 今泉 由利

ニューヨーク日記(46) Blue Shoe(二)

感銘歌・御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」より (四)

自家産 白井 久吉(七)

花花草 伊藤八重子(九)

吟行 弓谷 久子(一二)

母さんの花 安藤 和代(一三)

白檀棚田 佐々木利幸(一八)

ヒマラヤの青いケシ 山本 恵子(二二)

三河湾 伊与田広子(二四)

朱雀門 小野可南子(二八)

ことよせ (三二)

物理学者と詩歌の世界(七) 一石(三六)

鎌田敬止という人(四十四) 鮫島 満(三八)

萬葉一葉(319) 今泉 忠芳(四〇)

「氷魚」のことから(115) 岡本八千代(四一)

ことのはスケッチ(380) 今泉 由利(四二)

和菓子街道(46) 平松 温子(四三)

お知らせ・編集後記・三河アララギ規定 (四四)

感 銘 歌

御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」より

憶茂吉先生

わが部屋に夕餉よろこびたまひつるみ齡はけふのわれにおなじき

P
141

かの日にも時雨ふりゐて引馬野を草鞋ふますにしたがひゆきき

P
142

歌集

一本の木

杉浦

弘

休湯日



休湯日

作詞 杉浦弘
作曲 杉浦道生

素裸に なりて開けたる

ガラス戸よ

休湯日なれば

ころ ふためく

アカンサス

蒲郡 岡本八千代

御津先生の企画展了はりて今日は来ぬ庭徑に高くアカンサスの花
陀毘囉忌ともひとり思ひて御津先生はや十年忌か六月二十八日

アカンサス欲しいだけ剪れよと先生の廊下よりの声今にし浮かぶ
梅雨晴の光の中のアカンサスうすむらさきのこのかぐはしさ

かたはらに置くのみにてよしと求めけり牧野富太郎「植物記」続と正
西風のそよぎ吹きくる西の窓茜を透かしのれんゆれつつ

十九にて嫁ぎし千代ちゃんきのふ亡し人には言へざるこの寂しさは
海への道散歩にゆけば遠畑より君が手をあぐわれも手を上げき

鳴海よりの君の紫陽花四年^{とせ}すぎ今年は咲きたりま白にぞま白

とりたてのレタスキャベツくれし人はや後ろ姿の遠くなりつつ

自家産

新城 白井久吉

種継ぎに蒔きて幾日来て見れば胡麻は見事に生え揃ひたり

蚕室に風を送りて光沢のあるよきまゆを作らむとせし

井戸端の太きケヤキは亡き父の生まれし年に植ゑたりと聞く

幹太く枝を四方に広げたるケヤキは樹齡百年を超す

厚蒔きの紫蘇しそは幾度も間引して柔らかき芽を摘むべくなりぬ

このごろになりて再び役にたつ最初のころの老眼鏡が

山百合の茎は伸びきり弓なりに撓める尖に蕾ふくらむ

このごろは螢はたるも育つ宇利川の近くに住むも足を運ばず

わが畑の農作物のほとんどは農薬なしに育つものなし

収穫は少しは遅くなるけれど茄子も南瓜も苗は自家産

じゃがいもの花

東京 今 泉 由 利

ほろほるとほんのり紫ゆれてゐる天辺に咲くじゃがいもの花
いかなりしことの次第か棘棘の草生え出でて丈なす日毎

実感のともなはずして光速の一秒ごとの三十万キロメートル

伝へたきことのいくつを携へて一步一步は大恩寺山

比較的ありふれてゐる炭素化合物に出来あがりゐるまると私

すんなりとしなやかにのび今年竹根元に幾つ皮残りつつ

山なみを尽くし濃緑杉の色杉の木ばかりひと日の旅は

じゃがいもの花咲く畑に身を寄せて通しやりをり対向車輛

道の辺に八重咲き十葉みつけたり遺伝子組み替へされたのかしら

満月に地球の影の映りゐる含まれをらむ私の影

花火草

豊川 伊藤八重子

青磁の瓶に矢羽根薄と紫陽花と入れて想ふは尼様のこと
鉢ごとに頂き来たりし花火草午後の三時を愛らしく咲く
裏庭のくきやかに咲く十葉の真白の花をひともと挿さん
先輩より教はりながら松の葉の剪定始むる定年の子は
庭木々の剪定はじめし子の脚立タワーのやうなアルミが光る
教はりつつ山茶花の芽をつもりたり初めて握る剪定鋏
可睡齊より去年こぞ購ひし百合の花赤色黄色今年も逢ひたり
はつ夏の甘き香りを漂はす夏なつ黄櫨はぜを活けぬ蒸し暑き今日
朝毎に朝顔かぞへるわが許に介護認定の通知書届く
電話口にて手拭ひ脱ぎし母在りき我を張る事も遂になかりし

南高梅

伊丹 青木玉枝

歩くのが日一日と辛くなりアララギの会へ淋しき諦め

カーテンを揺らせる風が涼しさを呼び入れてくれる七階の部屋

万緑の風吹き渡るこの部屋に早四年目の生きるしるしを

独り居の眠れぬ夜を滑走路のネオンの続くを暫し見てをり

散りてまだ間もなき黄色きいの名は知らずマンションへ続く敷石の上

近き寺の山門くぐり観音堂拝みて左十六羅漢も

友よりのマッサージ機にこの頃は夜の一刻癒さるる嬉しさ

ポケットに携帯電話たしかめて杖を頼りて今朝の歩みを

注文せし南高梅の宅急便まこといい味楽しみ続く

遊びゐし児らは帰りて公園に梅雨の晴れ間の風渡りゆく

吟行

豊川 弓谷 久子

ほつほつと萼紫陽花に白き花その名もやさし隅田の花火

朝焼けは雨の兆しか明けて行く東の空の朱に染まりをり

息をひそめ眺めてゐたりき幼なき日肅肅と行く雨乞の列

蓑かさに田植せし日も杳かなり早苗田はやも青田となりぬ

夏に弱き母の遺伝子そのままに血圧低しむし暑き朝

時折は飛び立つ烏の黒き影パン屑置きし燈籠の屋根

子に見ゆる螢火我に見えざれば目をこらし見る御津川川面

吟行会へ御津山山道登り行く緑真深き夏木立の中

消え逝きし縁もあれば新しき出逢ひもありて今日の御津山

一つのみ解けざるままに締切の迫り来りぬ漢字百選

胡麻の畝

豊川 内藤 志げ

朝夕に水を運びし胡麻の畝ぼつりぼつりに眼を凝らす

灌水に葱の葉先の水の玉きらりきら光り輝く

畝の端に休み見つむる葱の葉の先に光る色の映りを

漸くに並びて見ゆる胡麻の畝切り蛆に一本枯らしてしまふ

ジャンボ南瓜試みたしと言ふわれに若者早速種一袋

育て方拡大コピーも添へてありハローウインの仲間となりて

少しでも早くと蒔きしジャンボ南瓜南米産なり種はくちたり

再びの種届きたりまず三粒わが腰に巻き芽出しをさせむ

トンネルの西瓜の隅にジャンボ南瓜朝昼夜と置き場を変へて

銚花を鎌にことごと切り落す玉蜀黍の螟虫除けと

「母さんの花」

豊川 安藤 和代

冷害に米もリンゴも不作とふ岩手の友の短かき電話

風邪気味で起床のつらきを叱りつつほめつつ一人芝居の朝

つる薔薇はフェンスいっぱい咲きたれど友の病ははまだ癒えずと

植ゑて十日その存在を示すがに茄子とトマトは花咲き初めり

朝顔の双葉三本広ごれり孫は何やらことばかけゐる

修学旅行「京都の夜景はすごいよ」と孫の目のきらきらとして

母さんにと土産供へる孫娘母の好みを忘れてをらず

「実は丸く花は長くて面白いね」孫と見ている栗の木の下

嫁の植ゑし白薔薇次つぎ咲きたれば「母さんの花」と孫は名付けり

父の日に息子にもらひしブレスレット夫は照れつつ手首を見入る

金魚たち

岡崎 林 伊 佐 子

十五年ともに棲みたる金魚たちわが留守の間に盗難に遭ふ

傷つきて災難のがれし一匹の金魚は餌にも近寄りてこぬ

今生の別れもいつかくる日あり川水ゆたかに流るる池に

池の辺に立ちて寂しき広き池おもひで多き金魚の群れに

殊更に肥れる緋鯉に真鯉ゐて湧水ゆたかな庭すみの池

金網を張りて鍵かけ帰宅する週に一度は夫の飼育ぞ

杉木立になりて笹百合もたえてきぬ移植の庭に一本咲きたり

風ゆゑか触りし夫か笹百合の白き花卉蕊に汚れぬ

軒先の物干竿は鵜の止まり木となり餌を強請しぬ

夫の手のパンをくはへて鵜は庭木に巣ごもる子供に運ぶ

母の声に

東京 北川 宏 廸

「この雨が夜には行くよ」といふ母の声に送られ東京に向かふ

「おぢいちゃん死ぬまで長生きしてください」なるほどそれは約束できる

名城公園のベンチに憩ふ孫たちの頭上の藤が満開となる

家事労働のトラウマが消ゆ妻入るる新茶を飲みて喉潤ほせり

歳月が父の虚像を実像に光やさしく影あたたかく

近江路の一輛電車が野に止まり駅に降りたつ老婆がひとり

聞かれても答へられぬことがある元気？どうしてる？世の中どうなる？

ああさうかさうだったのよねこのごろは若者よりも遅れて気づく

ドリブルを身体からだを挺しブロックする反則箇所を抉り出すビデオ

ものは皆落ちつきどころに収むべし苺はジャムに林檎はパイに

初生り

春日井 清澤 範子

歌会へ出られぬことは淋しかり膝の痛みにぬり薬ぬる
皆様に会ひて語らひ出来ずして往復葉書を何回も読む

菜園の蕪菜は夫の指導にて吾施肥したり芽は盛り上る

初生りの胡瓜は畝より3cm上りた所に真すぐに伸びる

初生りの胡瓜イボイボ痛き程切り口より水盛り上る

老夫婦が住宅並ぶ一隅に植ゑし稲苗活着しをり

植ゑ終へた稲田の水面にゆらゆらと新築の屋根美しく映す

初生りの胡瓜をとりて神棚に供へる今朝の清しかりけり

角川短歌一月号を楽しみて吾は読むなりくり返しつつ

狭窄症また前立腺癌と戦ふる夫の肩をもみほぐすなり

優しき香り

豊橋 胃 甲 節 子

電子カルテに変わりて医師も看護師も時間に追はれて診察束の間

母鴨は孵りたるばかりの雛四羽羽交に隠し中州へ急ぐ

定家葛咲き満てる道近々と頬寄せ触れをり優しき香り

汝を想ふ夜のしじまに微かなる音して雨の降り来たるらし

アガリクス煎じる時は傍に待ちて見つめて師に感謝して

夏毎に食欲落ちる夫の為に園児の如きおにぎり作りぬ

雨音に和して蛙の鳴きはじむ蛙見る事も稀々にして

雀子は雨近き日も庭の木にいと楽しげに囀り止まず

雀よし鶯もよし野鳥来る庭を眺めてむねを癒しぬ

麦秋の美しき耀ひ見にゆけば数多の鴉も集ふ午後なり

白檀棚田

豊橋 佐々木利幸

雨降れる今日は開きたりパソコンのワードドリルを半年ぶりに

降雨の今日は交々にして楽しめたり風信帖の臨書もパソコンの操作も

広辞苑を紐解くなり外科医師に聞きたる疼痛と言う医学語を

歩くことが第一として加わりたり紫陽花を撮る野外実習に

休耕田を数多見下ろしつつ竜ヶ石の西裾に來たりカメラを携へ

暫くは獣の道かと錯覚して白檀棚田へ我は歩みて

休耕田が十五枚もあり漸くして我が來れる白檀棚田

猪が出没するといふ看板あり撮りに來たれる白檀棚田

尾が青き翡翠を見たり富幕の岸边に今日は散歩を續けて

今年より試行錯誤を續けつつ楽しみて居りカメラの操作を

槍ヶ岳

島根 金津 文枝

運転のうまい人とバスガイドの上手一体となりわが観光バス立山の旅

槍ヶ岳三一八〇米イワイイチヨウ白き五辨の花北アルプ스에登山の思出
雷鳥を見る事出来ず観光バスの中より振り返り振り返り槍ヶ岳を後に

槍ヶ岳の松の芽を食うホシガラス観光バスの中より見ゆる

立山連峰の間に富士山も見ゆ光と雲の奇跡

大山霊峰名水を汲むわれに時鳥啼く心奪はる

大正池深緑の水面を魚飛び波紋広がる消ゆる迄を

女学生時代テニス選手にてウインブルドンテニスのテレビは必ず見る深夜迄
十葉の白花咲く玄関に隣の友は突然に逝く

夕方に回覧板を持ち来たる今日も元氣と安堵せしに

夏至近き夕

蒲郡 杉浦恵美子

薔薇植ゑて我が庭らしくなりにけり父逝き三年初夏の彩り

父は百合母はチューリップ育てしが我が花壇には何れも咲かぬ

父母が愛でし草花庭の隅ひっそりそれでも咲きはじめたり

組の子も我にも最後の球技大会歓声そよ風抜ける青空

組の子の試合の応援何時の間に夢中になりて帽子振り居り

手柄あり悔しさありの試合報告大きく頷く担任我は

俯きてノート取る子の髪長き毛先が午後の風に揺れ居り

相談といふ程もなき訴へをメモにて渡せる組の女生徒

今の子は解決する術知らずして不満ばかりが増殖してゆく

珍しく夫と帰宅が揃ひたり並びて数歩夏至近き夕

ヒマラヤの青いケシ

豊川 山本恵子

粉碎の大きな機械は竹藪の中に陣取り竹を潰しゆく

朝な夕な見上げおりし楠の木の姿はなくて切株残る

こんなにも自然の森を切り取りて道は広がりゆかねばならぬか

きしきしと家壊す音鳴り響き隣の家は砂埃りたつ

鳥たちは寝ぐら失なひこの森に黒き固まりのやうに溢れ集ふ

日本橋で娘に会って銀座まで風に吹かれて歩いてゆきぬ

ジーパンの縫ひ目も見えぬ暗がり音楽響くアバクロの店

大鹿村山また山を登りゆきヒマラヤの青きケシ梅雨の晴れ間に

高山に咲きたる青き芥子の花葉はビロードにて俯きかげん

死にゆきし犬をさすりて幼子は起こしてよと泣きてゐたり

父の言葉

新城 半田うめ子

青々と木れんの葉数多にてわが庭中のさはやかなりぬ

香りよくひいらぎ南天楽しみて友と来たりて眺めつつをり

山鳩の鳴きてゐるなり元宮の氏神様へ参拝したりき

ビスケット鳩の形の味のよく大きかりけり鳩サブレーは

横浜の塩瀬様より今年又送り来たり鳩サブレーを

常々に短気は損気吾に言ひ父の言葉を思ひ出すなり

松原の高柳様より貰ひたりあずまえびすの南瓜の美味き

みずずかる美しヶ原登り行き老人大学数年前なりし

運転は孫の詩乃なり富山の湯の島温泉を楽しみき吾は

石雲寺星川先生と眺めつつ種々の花々咲きてゐるなり

青丹よし

豊川 堀川 勝子

六月の風に曲線あるごとし平城京址に刈り草匂ふ

青丹よし寧楽の都を歩きつつ古へ人のロマンに浸る

つやつやの色濃き葉蘭の茂みより低くこもれる雨蛙の声

山頂の薄墨桜の新緑は潤み潤みて朝よりの雨

怠たりて摘果せぬまま実りたる枇杷はたわわに陽に燿けり

枇杷の収穫キウイの摘果に明け暮れて着飾り街を歩く日もなし

枇杷の出荷は手早く済ませ生年なりどしのキウイの摘果す気の逸りつつ

鈴生りのキウイは小さき実を結び浅黒き実の円ら太りぬ

鈴生りのキウイは小さき実を結び挑み来ると日びに膨れ来

つつましく蔓の治まる筈もなくキウイの棚は強く撓みぬ

三河湾

豊橋 伊与田広子

テレビにて天麩羅揚ぐる音のしてふと思ひ出す母との日々を

近頃は一人暮しの日々にして天麩羅揚ぐることなくなりぬ

天麩羅を揚ぐれば食ぶはひもすがらばた餅作ればひもすがら食ぶ

山之路廻るが如く登り行く到着せしはその一軒家

木の間よりかすかに見ゆる三河湾一望なればわれの意満たせり

逝きし人入り来る人あり御津先生逝かれて早十年過ぎぬ

久しぶり稲石さんに再会し元気な姿九十二歳と云ふ

稲石さん百才以上日本一長寿とならむと励ましたり

われの母と稲石さんの母親は幼友達おけいさんと云ひし

母何時もわれに話しし幼の頃おけいさんおとめさんなど四人

花水木

名古屋 近藤 映子

息子よりの青いカーネーションは毎日の水替へ利きて今だ生々

夫見舞ひ帰りの路はうらさびし花水木の白は夕陽をあびて

わが夫の五月十日はバースデイ半休取りし娘と見舞ふ

母の日の青いカーネーションの水替は毎朝なれど嬉しさ一時

此の五月何やら冷んやり涼しくて衣替への手を休め

夫見舞ふ病院に行くバス通り葉櫻の間に間に花水木

カランコエ去年は小さき一基ひとつもとも今年四、五倍の花の数々

鉢植のアンスリウムは丈伸ばし私の背丈をついに越したり

水無月に入りて晴れ日の続きある日傘をさして夫の元へと

吾行けば夫はしっかり我手を握るテレビをつけてW杯の話を

今年また

豊川 平松 裕子

謝れと謝らないと三歳児幼き日の我と重なる

常の日はまた来るねと言ふ幼あしたは来ませんとしゃくりつつ言ふ

力入れず歌を作れと先生の言葉に安らぐ久びさの歌会

大木となりたるコニファーの間より三河湾見ゆる部屋に会する

我に親しくして下さる方がたを送迎できる今日を喜ぶ

草原くさはらとなりたる我の畑の中にグラジオラスの紅立てる

蜂が来て蝶が来て虻が来て入り来る客なき今日の骨董店

今年また葉の出でて来しミニ蓮に花芽は見えぬ今日の店閉づ

倒れたり倒されたり倒したり足にて奪ひ奪はるるボール

張り上ぐる男らの声は聞こえずして決着付かぬ試合続きぬ

探し当てたり

豊川 山口千恵子

千年の樹齢を保つ楠の葉替へ済みたり若みどりそよぐ

ひたすらにおぼつかなげに葱きざむ桃子十八黒髪さらさら

「はやぶさ」は六十億キロの旅を終へ燃え尽きにけり流星として

七年を遥か宇宙に「はやぶさ」は数十億年の昔を探れり

植ゑ終へし稚苗はいかにもたより無げ一日に終へしわが家の田植ゑ

田植機を操り夫の植ゑゆく田稚苗の淡きみどりになりゆく

整然と組体操の進む中わが孫つひに探し当てたり

ゼッケンの5胸に付けわが少年一瞬の間にかけ抜けてゆく

早や葉先白き半夏生の下陰よりシッポ切れたる蜥蜴逃げゆく

紅の小さき蕾ぐんぐんと天を指しゆく蓮葉をしのぎ

朱雀門

豊川 小野可南子

ぼたんの花のかほりの中をゆったりと花の御寺の登廊ゆく

御身丈三丈三尺の観世音衆生我等の小さし小さし

ひざまづきその御御足に手触れつつただ嬉しあゝ有難し

御御足は幾千万の人々の祈り手触れに輝き放つ

狭庭辺の木々の緑も嵩を増す雨降る今日の所在もなくて

しとど降る雨にその葉を揺らしつつ玉蜀黍の列は乱れず

朱雀よりまっすぐ真直ぐ北の方大極殿の丹色を目ざす

平城京をめぐらす回廊そを巡る夏草みどりさ揺らぎにつつ

共々に奈良朱雀門を見上げたりき一人一人の声を忘れず

輪回りにて手斧目確かと見しことも遙かとなりぬあゝ朱雀門

東歌(二)

足柄峠

豊川 夏目勝弘

遠長き木暗き山路足柄の峠をめざす雷よ去りゆけ

岩をはむ流れ白白はくはくとどろけり暗き木の間の恐ろしきまで

防人も杉に小暗き峠路を白き流れに沿ひつつ行きしや

足柄のみ坂畏し防人を忍びて暗き杉木立の坂

古も今も小暗き杉木立あかるむ所瀑布の飛沫

ウグイスのけたたましき声頭上より峠をめざす万葉古道

峠こす風音竜の吼ゆるとも恐れ行きしや防人たちも

山の芋掘りし跡そここに防人たちも食みしやあらむ

み顔などさやかならざる馬頭さま東国防人馬ゆるされし

恐ろしき形に伸び立つマムシグサ足柄峠路いと多くして

「招待」

山寺

東京 秋山逸穂

上りきて顔を上ぐれば山寺への残り百段遠くに見ゆる
欄干に身をのりだして川底の魚を追うとき水面のまぶし
ノズルより白き糸ひき木の上に薬剤散布の異臭はこもる
誠なき言葉の羅列に我もまた本音をかくしつくるわんとす
坂道を音立てながら空缶は笑うごとくにくろげ落ちゆく

「ビバヒル」

東京 井村喬泉

すりがらすに色は漂ふ往来のさまを店舗の扉に探る
ブロッコリのゆであがるさま雨上がりの緑の山は蒸気を放つ
偽物の煙突多きこの街は西東京のビバヒルと云ふ
夕立の止みて熱持つ地にもだふる蚯蚓にミネラルウォーターめぐむ
夏来る実感ひとつ風呂上がりの毛を持つすねは乾きが悪い

贈呈誌 六月号

「秋楡」

木村郁子

層あつく流されゆける花筏もつれながらのその先は見ず

「愛媛アララギ」

清水敏子

行くあての無き吾に似て電線に止りしままの一羽の鴉

「鹿児島アララギ」

郡山繁幸

峡の田に水を豊かに注ぎ居り散歩を止めて水音を聞く

「滋賀アララギ」

東澤きみ

三分咲きの桜を見上げ帰り来る道に祭りの鉦の聞ゆる

「高知アララギ」

坂本瑞枝

こんなにも土に緑の芽は立てり襦袢を干して雨上がる庭

「冬雷」

江原秀子

船溜りのもやひの船の一行に寒き春の雨ひそやかに降る

「灯」

渡辺万沙

広き湖かぐらき中に鳩の翅光り集めて浮きて漂ふ

「柊」

内上照子

手を入れれば温み伝はる初殻に埋もれしさつま諸うす紅に

「群山」

高橋良子

万作の花咲く林を歩み来て朝の陽差しに気力もどりつ

「榎の木」

林千代子

雑草の萌え立つ畑を悠然と雉子は尾羽を引きつつ歩む

「リゲル」 終刊号

添田博彬

吾妹子を待つ道の辺はたそがれのほろびの光いまだ残れり

(歌集「企救小詠」抄)

小島恒久

「リゲル」もう止め時かとふと君が漏らしし日ありき現となるか

永峯麗子

添田先生しのびて仰ぐ東京の空にかすかなるリゲルのひかり

歌集「百歳」
ももとしせ

日下部富美

天皇のみまかりければ我が命も終るかに思ふ昭和と共に

亡き夫の生まれし日なる星合ひの空は曇りて見ゆるものなし

空と水一つらなりに諏訪の湖緑に淀むつゆの明方

娘等の声聞きたしとひたすらに思ふ日のあり雨降りつづく

かぢ辛き世に百歳生きて大臣より銀の盃賜はりにけり
ももとしせ

「月虹」 四月号

保坂征子

子が育ち巣立ちゆきたるこの町にひと目千本桜まもなし

秋山逸穂

本堂の緑青の屋根の軒先に風にまかれて粉雪流る

「穂の原」

神谷叔子

分離帯のつつじを覆いて茅花の穂風に靡きてしろがねの帯

御津山吟行詠

二〇一〇年 六月二十七日

於 吞 龍

消え逝きしえにしもあれば新しき出逢ひもありて今日の御津山
わが一生貧乏ぐらしになれきってけんかも知らず樂しかりけり
さみどりの葉の真中に粒のごと黄の花品よく花筏さく

御津山に立てば三河湾一望に遙かに太平洋見ゆるなり

幾重にも青き曲線かさねつつ丸き大きい大恩寺山は

あれこれと思ひは巡るよけさの朝突然なりし君の永訣

夏きざすみどりの木下に白ましろ紫陽花の毬の大き純白

梅の葉より滴したたる御津山にて見えて嬉しやなつかしき顔

毎月の購読かさね出逢えたり歌よみ人の歌会のなか

移り来て御津山といふ山を知る黒人も仰ぎ見しその御津山を

雨にぬるる御津山緑深みをり生きゆく強さ吾も真似たし

水面にいちめんの水入りたる早苗田ははや青く青くなり

おほ先生のお屋敷に咲く十字花一りん挿しに吞龍のお店

山頂の薄墨桜の新緑に思ひはせつつ山道登る

いつの日かこの坂上りて訪れし御津山に佇ち遠き日思ふ

枝の伸びたる梅は会場の大窓を覆ひて今日の三河湾見えす

弓谷 久子
稲石 せき
松井 花子
伊与田 広子
山口 千恵子
三田 美奈子
小野 可南子
伊藤 八重子
牧原 正枝
鈴木 つや子
安藤 和代
岩瀬 信子
内藤 志げ
堀川 勝子
鈴木 美耶子
平松 裕子

刻一刻過ぎゆくときの重きこと吟行のときサッカーのとき

四季の径ひと花ひと花アジサイの土のパワー得て咲き継ぎゆく
縁側に磯夫氏いざなふひとときに足弱き音が小刻みにつたふ

カラタチの白い花に集る小蜂群がる音が庭四月の終り
明るさをやや増す空を翔ぶ鳥の姿は愛ほし生命輝やく

貴誌を読み四十の年にならんとす万葉のうた数々まなぶ
宵々の宵待草の花あかりなにとはなしにこのせつなさは

この山のもとに育ちしこの山にまた会はむため出でてゆきたり
若松のミドリの向ふに梅雨曇る三河の海を見つつ歌会

『いつよせ』

(西浦公民館いーはとぶ)

庭に咲く五月雨萩の一枝を今日の稽古の床に飾りぬ

雨上がり目高浮きくる睡蓮鉢に群れて泳ぐを見るは初めて
呼びとめてひとつの傘に夫をさそふ鳳来寺参道のこのにわか雨

幸田音頭をどる運動会の輪の中に吾が一年生は踊り踊るよ

一日の命と咲くのか萱草^{かんぞう}は哀しきまでにオレンジの色

懐かしき君に出会へてこの夕べともに見てをり窓辺の茜

北川 宏 廼
白井 信 昭
林伊 佐 子
金津 文 枝
胃甲 節 子
片山 武
岡本 八 千 代
今泉 由 利
夏目 勝 弘

吉見 幸 子
牧原 正 枝
岩瀬 信 子
三田 美 奈 子
稲吉 友 江
鈴木 美 耶 子

投稿

児童らの紋白蝶のその八つ放てばしばし花壇の花の上

蒲郡 伊藤晴枝

歩み来し九十年の思ひ出を胸にたたみて今日もたのしく
能もなく財もなければらからに助けられつつ苦しまざりき
いじめずにいじめられずにわが一生我も子等もみな弱虫なりき

豊川 稲石せき

厳かな宮中儀式も民の目に触れぬが権威保つ秘決か
東大寺大仏寄進世のため汚職の証拠今と変わらぬ
国造り遷都重ねて働きの職場与える公共事業

大阪 伊藤忠男

わが息子張り替えくれし障子戸の白さ嬉しく一日暮れゆく
竹島^{たけしま}の海を見通す潮見台白き航跡山の端に消ゆ
三河湾沖合^{みかわ}にしておほひなる自動車運搬船の動くともなく

豊川 白井信昭

「俳句」

植村公女

佐藤喜仙

屈託のなき少年や紅緑忌

永き日や古刹の庭をたもとほる

辻堂の開きて若葉明りかな

神苑の水濁りたり白はちす

雲の峰バイオリズムの沸点に

階を登りつめれば宮の余花

一石

皓一

万物に仏性あるてふ蚯蚓鳴く

釣人の水面暗めり梅雨の空

囀りの多彩なること繁殖期

父の日やビールの泡に父偲ぶ

竹寺やそこはなにやら秋風情

雨雲や黴の匂ひをはこびけり

物理学者と詩歌の世界 (7)

一 石

エルヴィン・シュレーディンガー(1887-1961)はオーストリアの理論物理学者である。20世紀前半に量子力学が誕生したが、それはそれまでにはほぼ完成していた古典物理学の体系をひっくりかえし、世の中の自然観・宇宙観を根底から変えてしまう革命的な出来事であった。E・シュレーディンガーはこの量子力学の基礎にある波動方程式を確立したことで有名である。1906年にウィーン大学に入学して物理学を学び、1921年にチューリヒ大学教授に就任。1926年に波動方程式(シュレーディンガー方程式)を導出して量子力学の確立に貢献した。1927年にベルリン大学教授。1933年にノーベル物理学賞を受賞。その後量子力学の解釈をめぐった論争の中では、コペンハーゲン学派による正統的な解釈を批判する目的で思考実験として広く一般にも知られるようになった「シュレーディンガーの猫」を提唱し物理学界に波紋を投げかけた。戦時中からさらに広い領域に研究活動を進め、1944年『生命とは何か 物理学者のみた生細胞』によって分子生物学への道を開く。1958年には『精神と物質 意識と科学的世界像をめぐる考察』によって人間の精神世界の解明に取り組んだ。その他『わが世界観』などがある。思索家として科学だけでなく多くの領域に足跡を残した20世紀の巨人である。

若き日にショーペンハウアーを読み耽った影響もあって、生涯ヒンドゥー教のヴェーダーンタ哲学に興味を有した。著書『精神と物質』には自身の思想を次のような言葉で記している。「西洋科学の構造に東洋の同一化の教理を同化させることによって精神世界は解き明かされる。一切の精神は一つだと言うべきだ。私はあえて、それは不滅だと言いたい。西洋の言葉でこれを表現するのは適さない。」「宗教は

科学に対抗するものではなく、むしろ宗教は、これとかかわりのない科学的な研究のもたらしたものによって支持されるものなのである。神は時空間のどこにも見出せない(以下略)」。シュレーディンガーによる次の詩(参考資料1)は、彼のこうした思想を反映するものである。

『放物線』

人生において、友よ

大切に意味があると見えるものは、

それで打ちひしがれたり

喜んだり幸福になっても、

行為や望みや考えは、

嘘じゃない、ただ自然の探求のためにする

実験の針の偶然的揺れほどの意味しかないのさ。

分子の衝突にすぎないのさ。

光の斑点のちらちら揺れるのが

君に法則を嗅ぎつけさせるのじゃない。

君が歓喜し戦慄するのが

人生の意義じゃない。

世界の精神だけが、そいつが仕事にかかれば

何千もの実験から

ついには一つ結果を出せるのさ。

もつとも、我々の知ったことかどうか？

参考資料

1 『シュレーディンガーの生涯』、D・ホフマン(櫻山義夫訳)、地人書館

和歌から派生した季語の本意（その一）

「笹」同人 佐藤喜仙

基本的季語は和歌の「お題」から派生したものが多くのであるが、俳人の中にもその事を理解して季語を使っている方はそれほど多くないように思う。そこで代表的季語についてその派生の根源を探り、季語の本意について確認をしていきたい。

尚、当稿を書くに当たっては主に「基本季語五〇〇選」山本健吉著講談社学芸文庫、「新日本歳時記」講談社も参考にした。

1 さみだれ 五月雨

梅雨と同じ意であるが梅雨が五月雨の降る時候を主に言うのに対し、雨そのものをさす。

古くから歌に詠まれ、この農耕期の長雨は鬱々と晴れない心の内を詠むのが本意であった。

「五月雨の空もどろに時鳥何を憂しとか夜ただ鳴くらむ」

紀貫之（古今集）

「五月雨の月はつれなきみ山よりひとりもいづる時鳥かなし」

藤原定家（新古今集）

例句

五月雨の降りのこしてや光堂

芭蕉

さみだれや大河を前に家二軒

五月雨や上野の山も見飽きたり

子は危篤さみだれひびきふりにけり

さみだれのあまだればかり浮御堂

蕪村

子規

蛇笏

青畝

2 短夜（夜のつまる・明易し・明早し）

夜は夏至にいたつてもっとも短くなる。俳句では日永は春、短夜は夏、夜長は秋、短日は冬と定めているが、これらはその感じを主にして言うのである。短歌は万葉以来見られる。

「ほととぎす霍公鳥来鳴く五月の短夜も独りし宿れば明かしかねつも」

詠人知らず（萬葉集）

「短夜の残りすくなくふけゆけばかねてものうき暁のそら」

藤原清正（新古今集）

明けやすい夏の夜を惜しむ気持は、ことに後朝の歌としてしばしば歌われた。『秋草子』でも清少納言は「夏は夜。月のころはさらなり。闇もなほ。（後略）」と夏の夜を賛美している。

例句

短夜や梁にかたむく山の月

短夜のあけゆく水の匂ひかな

明易き夜の夢にみしものを羞づ

短夜のつぎつぎ暁ける嶺の数

石鼎

万太郎

草城

龍太

鎌田敬止という人（四十四）

「月虹」 鮫島 満

青磁社時代

〈高村光太郎との交流（6）〉

拝啓 おハガキ忝く拝見いたしました。八月十日に又々御罹災のよしほんとに御気の毒でした。心から御見舞申上げます。お書きかけの玉稿一部御焼失のこと残念に存じます。御出来になり次第頂戴直ぐ組版にかかりたいと思ひます。

宮沢氏邸御全焼で故人の記念物はどうなりましたでせうか。御無事であつてくれればと祈つて居ります。

歌曲をおつけになられるもの二篇おありのようですが、曲はどなかか御存じのお方にお願ひしていただけますでせうか。その辺のこゝと御指示願ひます。

お寒さにむき愈々御自愛祈ります。仕事場が早くお出来になるといいですね。道程旧版もできるだけ早く出せるやう計画してをります。用紙は前ほどいいものは望めさうもありませんが。

（昭和二十年九月七日付）

空襲で宮沢邸全焼を知らせた光太郎への鎌田の返事である。ここに「焼失」した原稿とは「花と実」の原稿のことである。光太郎が、

この時点で「焼失」のショックを超えて、「又書き直す」というところには、未曾有の敗戦を罹災というかたちを伴つて経験した、しかも戦争讃美の詩を多作した人の心が見えないような気がするが、逆にその痛烈な衝撃からの一時的な逃避と読むべきなのだろうか。鎌田の手紙に光太郎は次のように返事を書いている。

おハガキ拝見、罹災お見舞忝く存じました。小生一ヶ月目の九月十日に表記の処に引き移りました。太田村の小屋にゆくまで当分此処に滞在いたします。一先づ落ちつきましたからこれから原稿再起稿をいたします。作曲は能時潔氏に願はうと思つてゐましたが、再考の上これは取りやめいたしました。ただ詩を巻頭に別組にするにとどめやうと思ひます。「花はなにゆゑ」「木の実草の実」二篇です。

（昭和二十年九月十三日付）

この手紙の「表記の処」とは「花巻町向小路佐藤隆房先生方」である。また、「能時潔氏」は「信時潔氏」の誤記である。この秋のうちに光太郎は太田村山口に完成した「小屋」に移るが、この家を鎌田が訪問したことが次の手紙に書かれている。

昨秋落葉を踏んで御新居に御供致し炉辺でおいしいお茶を頂きながらお話を伺つたこと、分教場で御雑炊を幾碗もかへながらの御物語などなどあの時の感動と自覚。（略）

「花と実」の巻頭見ひらき用玉稿御送り下さる趣、米岡氏への御便りにて拝見いたしました。まだ拝受にいたつて居りません。なほスケッチはおありでございましたか。少しも早く発行の運びになりますやう念じて居ります。何卒よろしく願ひ申し上げます。

(昭和二十一年一月十二日付)

これに対して光太郎は「花と実」の見開き用原稿、その組み方について次のように返事している。

『花と実』は所々に決定し難い個所が残つて居るため、遅れて居りますし、また遅れるほど印刷製本の条件がよくなる筈と思ふのでつい急がないやうな気持になつて居ります。いつぞやお話した序詩の肉筆複製挿入の件は、其後いろいろ書き試みましたが、結局肉筆を用ゐるのはイヤ味になり、俗におちるやうな気がして来て、中止する事にいたしました。やはり活字で組む方が正しいと存じます。右御諒承下さい。清潔な方がいいやうです。

(昭和二十一年二月九日付)

こうした意欲を持ち続けているから、戦後直ぐにも光太郎は知人に、「詩作多けれど発表しがたし。そのうち『花と実』と称する小詩集を青磁社より出版の予定。」(小森盛宛、昭和二十年九月二十七日付)、「近刊の詩集『花と実』は東京の出版社青磁社から出ますが初夏の頃にな

るでせう。小生手許に幾冊か来たら御贈呈いたします。」(三輪吉次郎宛、昭和二十一年一月十七日付)等と知らせてきていた。

さきに、「『道程』をめぐって」の章でも触れたが、光太郎は印税に關して青磁社に不審を抱くことがあった。それはこの『花と実』の刊行に際してもときに兆しことがあったやうで、宮崎丈二宛に「青磁社も何だかあやしいので詩集の原稿を送らずに居ます。そのうちつづけるものは段々つづけてゆくでせう。不誠実な店は必ずつづけます。」(昭和二十一年九月十二日付)と書いたこともある。しかしこの不審は青磁社という出版社に対するもので、編集者の鎌田に向けられるものでは決してない。右の宮崎に宛てた光太郎の長い手紙がある。前半で鎌田が信賴のおける人物であることを書き、後半に鎌田に一任する出版物一覧を挙げている。その後半を示す。

◎出版について一まとめに覚書を書きます。◎璞書房(鎌田氏)。「天上の炎」巻冊。「明るい時」巻冊。「ロダン伝」一冊(旧アトリエ社より出したもの)。「ゴッホ伝」一冊(叢文閣より昔出したもの)。「沢田伊四郎氏が承諾すれば「智恵子抄」一冊。「花と実」詩集一冊。以上。(略)◎札幌青磁社。「道程」復元版一冊。今の処右の通りです。

(昭和二十一年十二月二十六日付)

鎌田のところが璞書房となっていることについては後述する。

萬葉一葉(319)

今泉忠芳

磐姫その二十一 菟上足尼命

平成二十二年二月一日、愛知県宝飯郡小坂井町が愛知県豊川市と合併し、愛知県豊川市となった。この日、宝飯郡という名称がなくなった。宝飯郡には小坂井町の他に一宮町、音羽町、御津町があったが、一宮町、音羽町、御津町は小坂井町に先立って豊川市と合併し、豊川市となっていたため、小坂井町が最後の宝飯郡となった。

宝飯郡という名称は有史前からの「ほのくに」の名称を受け継いだものである。ほのくにには、大化改新の時、三河國と合併し、三河國になったと云われている。有史前からのほのくにの名称は宝飯郡に残っていた。江戸時代には宝飯郡は宝飯郡であった。三河二葉松上下二巻(天明四年)(1784)の原本には「宝飯郡」と記されている。その写本五巻には誤字が二ヶ所「宝飯」みられる。宝飯を書き誤って宝飯としたのである。この誤りが一般的となり、宝飯が宝飯になってしまったと思われる。

関西では目のことを「めえ」という様に、語尾を伸す習慣があった。「木のくに」が「きいのくに」となり、当字に紀伊が使用されたため、「木の國」が「紀伊の國」になった。「ほのくに」も「ほお」と発音し、当字に宝飯が用いられた。これが宝飯郡となっていた理由である。

ほのくにには現在の東三河を指している。

ほのくにの川は「ほの川」である。ほの川のほはおと呼ぶとき、当字に豊が用いられ、「豊川」「とよがわ」となった。下流の土地は「豊

川市」「とよかわし」となっている。

ほのくにの木の繁った土地は当字に鳳が用いられ「鳳來」「ほうらい」となった。

なお、三河國の河は矢作川で、川の國に美称「み」が付いて「三河國」となっている。

菟上足尼命

小坂井町には菟足神社(愛知県豊川市小坂井町宮脇二)がある。祭神は菟上足尼命である。

菟上足尼命は第八代孝元天皇の御裔、葛城襲津彦四世の御孫に当り、第二十一代雄略天皇の御代にはのくにの國造に任ぜられた。

菟上足尼命はほのくにの國造として治民の功を挙げたため、菟足神社の祭神として祀られた。

菟足神社の創立は天武天皇十三年(648)四月十一日とされている。菟上足尼命は没後、平井の柏木浜に祀られていたが、天武十三年、現在地に遷し祀られた。

醍醐天皇延喜五年(905)に編集がはじめられた「延喜式」(延喜五年、藤原時平・紀長谷雄・三善清行らが勅を受け、時平の没後、忠平が業を継ぎ延長五年927選進、康保四年967施行)の神名帳に菟足神社は記載がみられる(延喜式内社)。

大正七年に郷社から昇格、県社に列せられた。

磐之姫命と菟上足尼命

葛城襲津彦は神宮皇后紀、応神天皇紀(日本書紀)にその名がみられる。葛城襲津彦の娘が磐之姫命である。葛城襲津彦四世の孫が菟上足尼命である。

「氷魚」のことから (115) 岡本八千代

やっと梅雨入りになり、雨の音がする。

御津磯夫先生の遺品などの企画展も了わり、その大切な宝物をお返しに市の役員の方たちと私もお供して、御津邸へ伺った。

その日の午前の光は先生のお庭の木々を透して輝くばかりであった。この時季の花、れいのアカンサスが庭の径に咲き始めていた。

このアカンサスは、土屋文明先生のお庭の一株を掘り取って頂かれたものだった。濃い緑の広葉、うす紫の高い花梗に、いままでになく懐しさを感じたのであった。

先生の歌集（第四）、「アカンサスの径」さっそくひも繙いてみると、その後記に、

「一、子規の言葉に、『粗笨そはんと鹵奔ろもう、でたらめ、むちゃくちゃ。いかなる評も謹んで受けん、吾は只歌のやすやすと口に乗る来るがうれしくて。』といふのがある。敢て子規に助けをもとめるが如き不遜は私には更々無いが、歌を作るに第一の必要ことは歌が好きであるといふ土屋先生の言葉もあり、私は歌を作ることが大好きで、小学、中学の少年時代から作りはじめて、すでに六十年になる。そして時には只やすやすと口に乗って来るのがうれしくて、といふ場合も無しとしないのである。」

と、書かれていたことに、感動がつづいた私であった。

子規の言葉の「粗笨そはん」と「鹵奔ろもう」（かなづけは私がした）の「粗笨」は、あらい、そまつな意、「鹵奔」は、ぞんざい、手ぬかりがあるの意。子規は、こうした、でたらめな、また、むちゃくちゃな、批評を頂いても、それを謹んで受ける用意があったことに気づく。

子規の小説「月の都」は、幸田露伴に提したけれども、とりたててもらえなかったのではなく、自分自身に小説を書くことよりも、短詩型芸術に心を注ぐ何かが根底にあったのではないか。実際、露伴は、子規の小説に、出版界にもかけ合うことにも努めたらしい。（河東碧梧桐著「子規を語る」参考）

思うに、「月の都」は、ただ男女の現実にならないような世界のみが描かれているようにも思えたが、露伴の「風流佛」の方は、ひとりの男の生き方に一本すじの通った描き方のように思えた。そして、露伴は、その後、「一口剣」とか、「五重塔」など、現実の困難な状況に挑戦する主人公を描いてゆくようになった。

子規は、「月の都」を世に問うつもりではあったらしいが、稿を終えてから、高浜虚子に手紙を送って、その書信には、

「余は人間は嫌いだ、余の好きなのは天然だ。余は小説家にはならぬ。余は詩人になる。」

と、書いて、自分の気持ちをもらしていたらしい。（高浜虚子著「子規・漱石」20～21頁参考）

ことのはスケッチ(380) 今泉 由利

『FIFA』

「東京の人口が減ってしまった！」と感じるほど…町の様子が異なっていた。きっと、日本中、同じ状態だったのでしょう。

サッカーの世界選手権。人々は「テレビ」に集中していた。南アフリカまで行ってしまった人も何人か知っている。

極端な夜中であるのかかわらず、『一つのボールをめぐり、走る！守る！反則をする！力！美！団結！物理！…』と騒いでいた時、一九七八年、今から三十二年前、アルゼンチンに住んでいた時もこんなことがあった、と甦った。その時書いたものを。

思ったってアルゼンチンに移り住み、十二回目の冬の最中です。

黄土色豊かに流れるラ・プラタ河からの湿度に満ち満ちたブエノス・アイレスの七月。

碁盤割りの町並、それぞれの道の両側には大きな歩道があり、それぞれの並木が植えられ、子供達が三輪車で遊ぶ、買物がてらの人達が立ち話をする、駆け足るときも、子供の手をひいている時も、涙がちの日も、その時々々の並木と共に、四季が巡ってゆくのです。

地震も台風もない大地にめぐまれた、自信に満ちた楽天性。ヨーロッパ

パ文化からきている道徳、生活用式、人間を苦しめることがない穏やかなブエノス・アイレス。

第十一回のサッカー世界選手権、アルゼンチンの初めての勝利。国中の人が、もれなく何十センチか、跳び上った感じですよ。

勝利の瞬間、全部の教会の鐘が鳴り渡ったのを皮切りに、車の警笛、鍋をたたく音、とにかく大きな音をたて、ラテン系のリズムミカルな身体に、勝利のエネルギを内に秘められなく、老も若きもは当然のことで、今にも赤ちゃんが生まれそうな人も、歩けない赤ん坊はベビーカーに、国家総動員法が発令されたみたい、家の外へ、目抜き通りへと繰り出し、恥も外聞も銜もなく、勝利を叫び、歩き踊り、泣く。

私も、アルゼンチン国籍を持つ娘と共に、熱気の町に出てみた。

アルゼンチン国旗にくるまって泣きながら歩く「お年寄り」、を見て貰い泣いた。

毎日、キロの単位で牛肉を食べる頑丈な身体から「アルヘンティナ！アルヘンティナ！」を叫んでいる若者たちを見て、また涙を零した。

私のは、直接サッカーのことではなく、この出来事に、これほど集中できる人たちを見ての感激なのだけれど、とにかく涙を流しこの騒ぎの中にいた。

七歳の娘も、「涙がこぼれないように上を向いているんだよ」という。底抜けに単純に国の色の空色と白色の縞模様になりきって、こんなにも、身も心も喜びに浸りきってしまう人達が羨ましかった。

和菓子街道 (46)

<http://www.trad-sweets.com/>

平 松 温 子

〈夏の月御油より出でて赤坂や〉

夏の夜の短さと、御油～赤坂間の距離の短さとをかけて、松尾芭蕉はこう詠んだ。両宿の間屋場間の距離はわずか16町(約1.7km)で、東海道中最も短い区間なのだ。小さな宿場ながら旅籠の数は多く、御油と共に赤坂の飯盛り女は東海道でも一際名高く、「赤坂狐」との異名まであったとか。客をたぶらかすのが上手だったのだろう。

残念ながら老舗和菓子屋は残っていないが、広重の浮世絵にも描かれた旅籠の大橋屋(旧鯛屋)が、江戸初期の慶安2年(1649)から変わらず営業を続けている。芭蕉が滞在した2階の部屋も残されており、一般客も宿泊できる。べんがらの千本格子の間か



ら街道を見下ろせば、気分はすっかり江戸時代。街道を行く人々と留め女の賑やかなやり取りが、今にも聞こえてきそう。

現当主で19代目という、全国でも数少ない現役の旅籠「大橋屋」

お知らせ

▽編集会は、八月八日(第二日曜日)に発行所にて行う。

▽九月号原稿は、七月三十一日(土)までに必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が期日までに到着しないと編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜・祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アララギ誌と共に返送しますので、返信用の封筒は不要です。

歌稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一一四・〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰め(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。
※八月号の発送は、月末になります。

編集後記

昨日は青天、今日は雨という日が続く梅雨の一日。六月二十七日に半年ぶりの歌会が御津山の呑龍において開催されました。

久しぶりに会い懐しがり、元気に出席できたことを喜び合いました。また、初めてお会いする講読会員の方達も旧知の如く語り合うことができました。三河アララギを通して心の交流ができていくからこそだと改めて実感致しました。

吟行詠の一首と、先に送ってあった一首の、それぞれの中から優秀歌が選ばれ、素敵な賞品があり、和気あいあいのうちに会を終えることができました。今回参加されなかった方々も、次の機会には是非参加され、三河アララギ会の仲間として交流できましたなら大変うれしく思います。

△御津山吟行会において御協力下さった方々にお礼申し上げます。(平松)

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。

◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ケ年分二万円、一ケ年分二万円の割で前納されたい。ただし、購読会員は、半ケ年分二千元、一ケ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様ただちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができ、

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十二年七月二十五日印刷 第五十七巻 第八号
平成二十二年八月一日発行 定価 六百元

編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘

発行人

平松 裕子・山口 千恵子

発行所

三河アララギ会 千四四一・〇三二一

豊川市 御津町 御馬 西三七

T E L (〇五三三)七五・二〇〇九

振替口座 〇〇八三〇・六・五六三二九

URL

E-mail yuri88@cronos.ocn.ne.jp

Homepage <http://www.llocn.ne.jp/~yuri/index.html>

印刷所

株式会社 桜創美